

子ども一人一人のよさを引き出す豊かな環境と造形表現

講師

東 良 雅 人 京都市総合教育センター指導室長、
京都市立芸術大学客員教授

1. はじめに

私は元々中学校の美術の教員で、今は京都市総合教育センター指導室長として働いています。以前、市立幼稚園の造形指導に関わる機会などもありたくさん学ばせていただきました。その時学んだ幼児期の造形表現の大切さをお伝えする中で、造形表現のノウハウのような話ではなく、自分の園だったらどうするかといったことを考えながら、聞いていただければと思います。

2. 子どもの絵を「聴く」と「聞く」

文部科学省では『初等教育資料』という幼稚園、小学校の先生方を対象にした月刊誌を発刊しています。この中の、『話題』というページに自分の息子のことを書きました。息子の絵に添えられた先生の二つの言葉についての話です。

この絵のことをすごく覚えているのは、いくつかのわけがあります。初めて見た時、私は何の絵なのか全く分かりませんでした。何だろうと思って見たら、絵の中に先生が、書いてくださっている言葉がありました。一つは、「お父さんと一緒に海に行ったの」と書いてあったので、ああこれは海に行った時の絵なのだなと、これを読んで初めて、何が描いてある絵なのかがわかりました。もう一つは、「これは、運動会の代休の翌日、朝一番に、自分から、紙をちょうだいと言って描きました。」と書いてありました。設定されたお絵描きの時間に描いたのではなく、登園してすぐに、自分からこの絵を描いたというわけです。親にしてみたら、普通に海に連れて行って楽しく遊んで、帰りの車でも多分、息子は寝ていたと思いますが、そんな日常の一場面です。正直、そんなに心に何か刻まれるような出来事がある時にあ

ったわけでもないと思っていたのですが、この先生の言葉を読んだ時に、そんなにあの時のことが面白かったのだなあということを、初めて知れたのです。ここはすごく大事なことだと思います。『初等教育資料』の中に書きました。

子どもの絵は、見るだけのものだと思います。でも、保護者もたくさんおられるかと思いますが、子どもの絵は見るだけではなく「聴く」ということが大事です。絵の中には、子どもの願いとか、思いとか、いろいろなものがあります。ですから、絵を通して子どもが、何を考えているのか、どんなことを考えていたのか、そういったことを聴くということが大事だと思います。保護者に「子どもの絵を真ん中に置いて、子どもの絵を聴いたりしたことはありますか。」と聞いても、なかなかないようです。「描けたよ」と持って帰ってきたら、「上手だね」とか「うまく描けたね」と声をかけるのはもちろん大事です。けれど、「上手だね」とか「うまく描けたね」というのは、子どもが描いているプロセスを全く知らなくても言える言葉だということです。ほめることはすごく大切なことだと思いますが、指導者としては、「上手だね」「うまいね」というのは描いている間に絵を全く見なくても言える言葉なのだと理解してほしいと思います。子どもの絵を言葉として「聴く」と共に、どんなことが子どもの中に出来事としてあったのかということ「聞く」ということが大事なのだと自分の経験からも思っています。何を描いたか、どう描いたかということももちろん大事なことの一つではありますが、実はこれは、結果だけを聞いているわけです。でも、子どもたちの絵を「聞く」時に、耳を傾けてほしいのは、その過程なのです。いったいどうい

ロセスを経て、子どもが描こうと思ったか、どう
いう出来事、どういう思いがあって、描こうと思
ったか。発達の段階はそれぞれありますから、年
齢によって言えない場合もありますが、大事にし
てほしいのは、結果だけではなくて、過程の部分
なのです。

3. 描くことは目的ではなく手段

教育における絵は、大人から見て上手に描くこ
とが目的ではなく、描くことはあくまで手段であ
って、それを介して人とコミュニケーションする
ことが大事なのです。これは幼い子どもであって
も一緒です。人と人をつなぐツールになっている
ということを大事にしていくと、表現することの
意味が、コミュニケーションを積み重ねることで
分かっていくようになるのです。でも、描くこと
を目的にしていくと、子どもの中には「上手に描
けたか、上手に描けてないか」という二つの価値
観しか生まれません。「自分がこう描きたいと思
うものが描けないとか、自分がこう描きたいもの
が描けた」というならまだしも、描くこと自体が
目的化すると、大人から見た作品の出来具合が、
「大人が喜ぶような絵が描けたか、描けてない
か」というような二つの価値観しか生み出すこと
ができなくなっていくわけです。描くこと自体を
目的にすると、大概、子ども不在の状態で、大人
の必然性だけで進んでいくような活動、見栄えが
いいとか、面白そうかもしれないという大人の都
合で、子どもが活動するケースが多くなります。
ですから、子どもに必然性がある、子どもの自分
事になるといったところが非常に大切なところ
です。描くことを目的とするのではなく、描くこ
とを手段として、子ども一人一人の過程を大事に
してほしいのです。

過程の中で共感する

次に大事なのが、過程の中で共感するというこ
とです。「そうだね。」「そうなのだよね。」とい
うふうに共感するというのを、先生方は日常当
り前のようにされていると思います。「あーそう
か。そういうふうになっているんだね。」と、過程に

共感するという気持ちが非常に大事です。出来上
がりだけが大事なのではなくて、行為全てが大
切なのだということを、理屈ではなく先生方との
関わりの中で子どもが理解していくことが必要
だと思います。だから、発達に応じて友達同士
で共感する場面も大事にしたいと思います。その
ような場も作るというのが指導者の役割ですし、
保護者にもきちんと子どもの絵と過程を共感し
てもらおうようにします。なかなかできない家
庭なら、きっかけを与えてあげる、そういうこ
とを先生方が教えてあげたり、様々な人たち
と共感する場面を作ったりしていくことが、先
生方に求められている重要な役割の一つなの
かなと思います。

過程を伝える取り組み

最近、全国の小・中学校のいろいろな展覧会・
作品展での工夫が見られるようになりました。
小・中学校でも、図工とか美術の絵を展示す
ると、上手に描いたか、上手に描いてないか
という二つのことばかりが目立ってしまうと
ころに、先生方が悩んでおられることも少
なくありません。子どものプロセスという
ものが保護者にもわかってもらえるよう
な工夫をされている展覧会が、この10
年くらいで徐々に出てきました。よくあ
るのは、子どもの学びのプロセスを見
せる「授業展」のような形で、子ども
の作品を展示する方法です。子ども
の作品に、解説だけでなく一体どう
いう活動から生まれたかといった活
動のプロセスを展示したり、活動
の過程を動画に撮って会場に流
したりして、保護者に、一体どう
いうプロセスで作品が出来上
ったのかということを知って
もらうということが、最近、大
変活発になってきています。
こういう展覧会を、企画推
進しているのは、比較的若い
先生方です。先生方は、子
どもの描いたもの、つく
ったものを、結果だけ
ではなく、その過程
でがんばってやっ
ていたとか、こんな
ことを工夫して
いたということ
を一番よくわか
っているのです。
保護者は、出来
上がったもの
だけしか見
ないことも
多いので、
その過程
はなかなか
伝わりに
くいとい
うジレン
マがあり
ます。で
すから、
先生方
が自分
の目で
見た
もの
を、何
とか
保護
者に

知ってもらえないかという思いで、こういった展覧会の工夫があるのです。先生たちが作成した動画神奈川県で開催された「美術の学び展」は、Youtubeでも期間中、配信され、保護者も見られます。作品は、もちろん展示してありますが、過程を保護者に知ってもらおう動画を放映するといった取組は、挑戦なのだと思います。このことは、先生になったばかりの人たちの勉強の場にもなっていて、もう一つ大きな役割を果たしています。こういった背景には、小中学校も、幼稚園も一部そうだったのかもしれませんが、どちらかという表現の活動の結果に重点を置いた展示が、今まで少なくなかったという事実があったかなと思います。表現の活動の過程に重点を置いた展示が増えてきた背景には、今回の教育要領や指針の改定のベースである、資質・能力の育成（何を身につけさせていくのか）があると言えます。私が専門にしている中学校美術でいうと、先に述べた通り生徒が絵を描くこと自体が目的ではないということです。絵を描くことを通して、探したり、知ったり、身につけたり、調べたり、思いついたり、閃いたり、感じ取ったりといったプロセスに学びがあるわけです。活動の過程に、教科の本質と学びがあると言えると思います。幼児教育における「表現」も、実は、過程の中の試行錯誤や挑戦や、失敗も含めて、そこに子どもたちの学びがあるのです。表現の結果に重点を置いた授業から、表現の活動の過程に重点を置くようになることが、授業の中で非常に大切にされるようになってきました。そこで、表現の活動の結果に重点を置いた展示が、表現の過程に重点を置いた展示になってきたのは必然だと思います。授業や活動が、ずいぶん変わってきた中で、子どもたちの過程を大事にすることにつながっているのだと思います。うまく描けたか、うまく描けなかったか、この二つの価値観ではなく、何を学んだのか、どんなことに気付いたのか、ということをお大事にすることが、今、求められていることだと思います。

4. 表現における学びについて考える

表現における子どもの学びについて考えるのに、

117枚の絵を見ていきましょう。これらを見ると、どんなふうに表現が変わってきたのかを見ることができるようになります。

画面で、一人の子どもの3～21歳までの絵を見ながら、その絵を通して表現の道筋を見ていく。

一人の子どもの18年間の人生を、絵を通して一気に見ました。いろいろな子どもがいますから、当然、同じような道筋を通るわけではありませんが、表現というのを連続して見ていくと、道筋が見えるようです。最初の頃の子どもたちは、何かを描くというより、その行為を楽しんでいます。ガリガリガリとペンを回して描いたりするのはスクリブルとも呼ばれますが、その時に凸凹の紙を渡したら、その凸凹の感触がすごく楽しくて、延々と楽しむ時期もあります。

やがて自分の身の周りのものやその子自身の生き方と関わりのあるものが描かれるようになってきます。その時期その時期の子どもの生き方と大きく関わりながら変わっていきます。表現というのは、単に目の前にあるものを描くだけではなく、子どもの経験や体験、学んだことや、日常生活、園や学校や地域社会、自然環境や、京都なら京都の文化といったいろいろな関わりに影響を受けています。子どもたちは、それらの関わりの中で、考えたり、感じたりしているわけです。この関わりというのは、発達の段階によってそんなに大きく変わるわけではありませんが、小学生から中学生、高校生になっていくと、関わりの深さや関わり方というのが変わっていくのだと思います。このように子どもが生きて関わったことと、造形表現で表れてくるものとは決して離れているわけではないのです。

年齢に応じた表現

子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現する、いわゆる表現領域では、その時期だからこそ感じ取れることや考えられることがあり、それを大事にすることが求められます。年齢を超えたような描き方を、大人の都合で教えるということは、本来は自分自身で出会って、自分

自身で気が付いて、自分自身で試してみて、といった機会をすべて奪ってしまうということになるのです。大人の必然性が高い造形表現というのは、子どもの大事なところを、中抜けさせ飛ばしてしまうことにつながっているということです。ここにいる先生方だけでなく保護者を含め、全ての大人がそこをちゃんと理解してないとだめだと思います。その時その時の子どもの「今」があるわけです。「次でいいかな。」ではないのです。その時に気付けないのに、「その次」で気付けるということはありません。私たち大人が、「5歳の時の気持ちになりなさい。」と言われても、なかなか難しいのと同じです。寄り添うこと、寄り添おうと努力することはできても「気持ちになる」というのはそう簡単にはできません。それが成長であり発達なのだろうと思います。ピカソの絵を子どもに見せたら「変な絵」と言います。それから、「だれでもかける絵やのに、何で有名なん？」と言うのです。けれど、ピカソがああ年齢であの絵を描けるということがすごいのです。「子どもの気持ちをずっと持ち続けるという所が、表現の中で非常に難しいことである。」と本人も言っています。いろいろなことを学び、知識もいろいろ入ってきますから、子どもの時の気持ちをずっと持続させるということは何より難しいことなのでしょう。最近ではインターネット等で、昔以上にいろいろな情報や知識が入ってくる時代ですから、なおさらです。「今」というのはそこにしかないのですから、その時その時の子どもの「今」を大事にし、後回しにしないということです。保育や幼児教育でも、毎時間毎時間を大事にしていると思いますが、表現の領域の中では特に大事にしていく必要があります。

5. 予測困難な時代を生きる子どもたち

今、皆さんの目の前にいる子どもたちも、いずれ大人になって社会に出ます。これからもっと先の社会のことを考えると、なかなか大変な時代に来たなと思います。子どもたちは、自分たちが生きること、生きてきたこととの大きな関わりの中で表現をしています。しかし、この自分との関わり

りというものも、今まで我々が子どもの頃に思い描いていた関わり、私たちが子どもの頃体験していた関わりとはずいぶん違う関わりの中で生活し、生きていかなければならないのだと思います。Society5.0、超スマート社会という言葉も当たり前のように言うようになりました。いろいろなものがインターネットとつながって、非常に便利な世の中になり、昨今では人工知能 AI が話題になっています。人間をいろいろと助けてくれる新しいものがどんどん開発され、便利な世の中になっていくのだらうと思います。しかし、便利というのは、ものを考えなくて済むという面を持っています。それをどう考えていくのかというのが非常に大事だと思います。

私が子どもの頃、マジックテープの靴が売り出されました。便利で、ちょうちょ結びをしなくてよくなりました。ところがその後、最近の子はちょうちょ結びができないというニュースになったのです。これを退化というのか、私にはわかりませんが、便利になるということは、できなくなるということなのです。もっと古い話だと、私の小学校の時は、筆箱の中に肥後守という小刀みたいなのが入っていて、鉛筆なんかを自分で削っていました。カッターナイフとか、かみそりなんかでも、鉛筆を削っていました。その後に電動鉛筆削りという、とても便利なものが出ました。でも、鉛筆を削っている時、左右対称とか（昔は、鉛筆は高価でしたから）無駄にならないようにできるだけ最小限に削ろうとか、いろいろなことを考えていたのです。でも、電動鉛筆削りは、何も考えなくても最適化して、一番とがった状態にしてくれます。一つ便利になるということは、一つ考えなくてよいということです。二つ便利になるということは、二つ考えなくてよい、その内、何も考えなくなってしまうかもしれません。そういう社会に近づいているのです。便利になるのは大事なことです。教育の面から考えたら、便利さということだけを完全に受け入れてよいのだろうかと改めて考えていく必要があると思います。

スマートフォンでできる「AI 画伯」というソフトがあります。これは自分で撮った写真でいろいろ

ろな自画像を描いてくれるものです。中学校の研修会で、夏休みの宿題で「AI 画伯」で描いた自画像が出されたらどうするかと尋ねたら、先生方はうつむいていました。更に進んだ別のソフトを使うと、顔の絵が歌いだします。これらのソフトを使うと、誰にでも簡単にできてしまいます。さらに、テキストを入れるだけで AI が絵を描くソフト、例えば、「眼鏡をかけた少年少女、夕焼け」と入力するだけで、絵が生成されます。モネ風の水彩画も描けてしまうのです。

御承知の通り、ChatGPT は質問したことに非常にスマートに答えてくれます。例えば、「幼児の表現で大切にすべきことは何ですか?」と尋ねると、なかなか的を得たことを答えます。全部が正しいとは思えませんが、AI は今後、止めどなく進化していくでしょう。

平成30年の総務省の資料によると、「機械化の可能性が高い職業」は、おそらく AI 等に置き換わっていき、今後は AI を活用した職業が創出されるのではないかと予測しています。

野村総研が2015年に出した「人工知能やロボット等に入れ替わる可能性が高い100種の職業」として、特別な知識やスキルが求められない職業やデータの分析や秩序的、体系的操作が求められる職業というものが挙がっていました。逆に、先生方も含めた、教育とか芸術とか歴史とか考古学とか、そういう抽象的な概念を整理するとか、知識を要求されるような職業などは残るのではないかというのが当時の分析でした。しかし、中国のニュースによると、大丈夫だと言われていた芸術分野でも、画像生成 AI で絵が生成され、イラストレーターの求人が7割減となり話題になっています。

経済産業省が出した「未来人材ビジョン」によると、2015年までは注意深さ、ミスがないこと、責任感、まじめさ、スピード感、粘り強さ等が目指すべきゴールとして捉えられていましたが、これからの変化の激しい社会では問題発見力、的確な予測、革新性といったことが求められるようです。誤解されては困りますが、注意深さやミスがないこと、責任感や真面目が要らないという

わけではありません。しかしこれらはゴールではないというわけです。今までは、これらが備われば将来大丈夫ですよという時代でしたが、もうこれからは、そうではないのだということです。何かをさせようという、いわゆるコンテンツ(教材)ベースを起点とした造形表現の活動づくりではなく、そこを通してどういった子どもたちを育ていこうかという、いわゆるコンピテンシー(資質・能力)ベースの育成を目指すことが大事なのです。つついさせることから考えてしまいがちですが、目の前の子どもたちを見た時に、どういう造形活動をすることによって、どういう姿を先生方が思い浮かべるのか、目指していくのかということの起点にするような造形表現について考えていく必要があるかと思います。何をさせようかではなく、子どもたちの姿をイメージしながら、それを実現するための活動には何があるのかと考えていく必要があるのだと思います。

表現活動の過程の中での遊び

表現の過程には学びがあります。例えば、子どもが自転車に乗る練習をする前に、自転車の前に子どもを乗せて、大人がハンドルを持って自転車に乗ることを経験させることがあると思います。なぜかというと、自転車は頭で分かっているけど乗れないからです。ハンドルを持ってペダルをこいだら乗れるのだということは分かっているけど、できません。分かっているけどできないというのが世の中にはあります。造形表現もこれに近く、分かっているからといってできるわけではないのです。ですから、自分たちで好きにやりなさいではなく、目指す姿に向かうために、先生が自転車でいうとハンドルを持ってやって、道筋を見せてやるというようなこと(ルールに乗せるというわけではなく)取っ掛かりを考えてやるということがあっていいわけです。しかし、子どもたちに、自分で考え試行錯誤させず、失敗を恐れて、いつまでもハンドルを離さなかったり、表現のゴールを何か先生が決めてしまったりすることも少なくありません。子どもにやらせているような感じに見えて、実は決まったコースを行かせてし

もう先生もいます。これでは子どもの考えることはほとんどありません。単にペダルを漕いで、先生の敷いたレール上を行かせているだけです。やはり、子どもが「自分事」として、自分でこういうことをやってみたいなどと思い、そこへ向かって自分でハンドルを持ってペダルを漕いで、というふうになる必要があるのです。しかしその時に、自由にさせたらいいのだということで、自転車だけ渡したら、子どもたちは好きにするのだと思いますが、ここに先生の目指すものが無いというのは単なる先生の放任です。このような活動では学べる子と学べない子が出てきてしまいます。園での表現活動では先生が、活動のねらい、めあてをしっかりと持って、それを子どもたちと共有しながら前に進んでいくような造形活動であることが大切です。それから、これしかできないという幅の狭い活動、材料の準備や環境の設定が、非常に狭い幅でされていて、子どもは一生懸命やろうとするのだけれど、周りの壁に阻まれて、結局、先生が予測した所に、単に向かわせているだけといった活動になってしまえば、子どもたちの学びの経験はなかなか生まれてきません。幼い子どもであれ、小学生、中学生であれ、活動というのは、子どもたちが自分でこういうことをしたいという思いを持ちながら進んでいくわけですが、何かうまくいかないことに出合っても、子どもたち自身が、そこを乗り越えていくといったことが過程にあるのだということです。

6. 活動の過程の中で学ぶ子ども

描いている内に最初の意図から逸れてしまったけれど、思い直し、工夫して描き上げた子どもに対して、作品を見た先生が、その過程を捉え認められているかが大切です。作品を見て、そのことを言ってあげられるかどうかです。結果しか見ていない先生には過程の学びを見取ることはできません。大事なことは過程における子どもたちの学びをしっかりと見取り「ここを上手にやったよな」と言えるよう、活動をちゃんと見ていたかということです。ただ、園やクラスによって、人数も違いますし、配置されている先生の数も違いま

すし、当然、全部は見られないということもあるでしょう。見られないか、見られるか、ではなく、見ようとしているか、そういう子どもの過程を、行為を、見逃すまいとするかどうかだと思います。最初から、そういうことを見ようと思わなかったら、どんな条件になっても見られません。過程の中でそういうことが起こっているということを見えようとする所が重要なのだと思ってもらいたいです。

例えば、画面いっぱい「点」を描いた後に、背景を塗りつぶしたくなった子どもは、点を避けて背景を塗らなければならないので大変です。でもこの経験が、次、同じことはしんどいから、今度は背景を塗ってから点を打とうという学びにつながっていくわけです。子どもがこの絵を持って来た時に、「大変やったね」、「次からどうする?」と先生が問えば、子どもは考えて、「次はこうする。」と言うかもしれません。でも、プロセスを見ていない先生には子どものこれからの姿は分かりません。プロセスの中に子どもの学び、意思、苦労等が入っています。先生方が、そういうのを、何が何でも見てやろうというようになればいいなと思います。

また、はしご車を描く際、子どもは赤の上を塗りつぶさないように時間をかけて描いていました。先生が、その姿をちゃんと見て子どもに返していく。できたものが上手か、そうでないかだけではなくて、子どもが一番力を入れたところ、一生懸命やっていたところ、大事にしているところを捉えることが大事なわけです。そう言ったところを、絵を通して子どもたちに聞いて、共感するといったことが大切です。

赤い船を描いている子どもがいて、私は内心、(この赤い船がいいな)と思っていましたが、子どもは、白色で塗りつぶしました。赤い船がいいと思っていたのは、私の勝手、私の感覚で見てただけで、子どもには子どもの理由がそこにあるのです。

子どもの絵というのには理由があります。これは決して楽しい理由ばかりではないのかもしれませんが、そこをしっかりと知るというこ

とが非常に重要なのです。子どもには子どもなりのしっかりと理由があり、幼い子ほど理由がしっかりしています。別に、大人に忖度する必要はないからでしょう。それを聞いて、共感していくプロセスが、園の先生方も保護者も非常に大事だと知ってほしいのです。大人の理由による見栄えのいい絵を描かす等ということは、何の意味もないと私は思います。活動のめあてを先生が持って、子どもたちがすべてを自分事としながら、実はいろいろなプロセスの中で、課題を乗り越えているわけです。思い通りに行かないこともあります。そういったことを乗り越えて、自分のいわゆる「答え」をつくりだしていくというのが造形表現なのだろうと思います。子どもたちそれぞれが生み出す造形表現の「答え」というのは違います。それと同じくらい「答え」への道筋もそれぞれ違うわけです。結果の違いを見ることも大事ですが、どういう道筋を通っているのかを見ることを大事にして、その道筋の中で、先生方自身が、いろんな育ちがあったなあと思うことをお家の人に伝えてあげてほしいと思います。こういったことが、子どもたちの表現を意味あるものにしていくことにつながるのかなと思います。

子どもたちの表現についてここまでお話しましたが、心を動かす出来事に触れ、感性を働かせて描いたり作ったりという場面だけでなく、様々な素材を実際に触ってみて、トゲトゲしていたとか、ヌルヌルが気持ちいいなど、素材の特徴や表現の仕方などに気付いたりするという場面や、感じたことや考えたことを、ああしたいな、こうしたいなと自分で考えたり、友達同士で表現したりする過程を楽しむという場面もあります。こういうプロセスが、造形表現の中にあるわけです。素材との出会いだけを取り上げて、そこだけですべて終わらせてしまうというのではなく、こういった過程を大事にしながら、どんな材料を使うのか、どんな活動をするのかということ、先生方が考えてほしいと思います。私がこうしたらいいですよねと言ったことを、聞いてするのではなくて、先生方が考えるのです。それは、ここに来て居られる先生方が、それぞれの園で子どものことを一番

よく知っている存在だからです。子どもたちが一番いろんな育ち方ができるような方法、一番いい方法を考えるのは、それぞれの園に居られる先生しかないのです。一番子ども達のことを分かっているという自信をもって、いろいろと挑戦してほしいと思います。その時に、何回も言いますが、子どもの姿が消えてしまわないように気を付けてください。気が付いたら大人の必然性だけでやっているということがありますので、子どもを第一に考えて実践してください。

表現する喜びを味わう、表現への意欲というのは、過程にあります。幼、保、認定こども園等、それぞれの特色も担保しながら、育成すべき「五領域」や、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」といったものがずいぶん整理されました。私も、その頃、文部科学省に居りましたが、幼児教育課の方は厚生労働省とやり取りしながら考えていこうとしておりました。こういった共通性を持つというのはいいことだなと思っています。

「幼保小の架け橋のプログラム」調査研究事業の取組も進んでいますが、正に、子どもたちを全体で育てていくことに繋がっていくのだと思います。幼、保、認定こども園等においても、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し、連携しながら進んでいく、そして、小学校に繋がっていくというわけです。こういったことは当然、園の中で考えますが、より大きな枠の中でも考えられるようになっていくことが大事だなと思います。その意味でも、こういう合同で研修できる機会は重要であり、これからも、どんどん進んでいけばいいと思います。ご存じだと思いますが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、決して「到達する目標」を示しているわけではありません。また、これを、一つ一つ個別に取り出して指導するものでもありません。やはり、ねらいとか内容に基づいて育まれていく資質・能力を示す幼児の具体的な姿なのだということです。先ほども言ったように、何をさせるのかというのは当然、活動を考えていく上で重要な要素ではありますが、ただ、活動だけさせたらいいという話ではありません。「活動あって学び無し」ではいけま

せん。子どもの具体的な姿で活動を捉えながら、先生方が指導を行う時に、一つの方向性、指針として捉えていくということが大事だということです。そして、こういった姿を、小学校の教員と共有することによって、小学校教育との接続を図っていくことが期待されているのだと思います。これは、我々の願いであり、保護者の願いでもあります。何より、子どもたち自身が願っていることを実現していくのだということを意識してやっていくことが大事だと思います。

資質・能力ベースの視点を持つ

また、資質・能力ベースの視点をしっかり持つということが大事で、「表現」という領域の中だけで表現活動を考えるのではだめなわけです。小中学校、図工の中だけで図工を考え、美術の教科の中だけで美術のことを考えていたらだめなのです。もう少し広い視野で考えていく。つまり、大きな森の中で木を見る視点と森を見る視点の両方を持ちながら、考えていくというのが大事だと思います。幼稚園でいうところの、教育課程において、この五領域の中での「表現」というものはどうあるのか、他の四領域とどう関連させていくのかという視点に立って考えていただければと思います。

もう一つは、社会の中に、保・幼・認定こども園等があり、その中で教育課程が組まれて、その中に五領域があり、その中の「表現」の中で、つくったり描いたりしています。その時に、もっと広い視点に立って、この活動にどういう意味があるのか、この活動が将来にわたってどういうことにつながっていくのかを考えてほしいと思います。これは、一人一人の先生が考えるだけでなく、園（所）全体で考え、共有しながら進めていくことが良いと思います。広い視野に立つということが、我々に非常に求められているということを、知っておいていただければと思います。それから、先程、人工知能の話をしましたけれど、我々が子どもの時に思い描いていた将来とは、多分全く違う（今の段階では我々も予想ができないような）社会の中で、今の子どもたちは生きていくの

だということです。そのことは、全ての校種等が考えながら、一体的に考えていくことになるのだらうと思いますが、幼児期というのは、非常に基盤になるところでもあります。その時にしか感じられない、考えられないということを、ぜひ大事にしてほしいと思います。そのことを飛び越えてできることを良しとする人もいるのですが、それは結局、空洞を作っているだけです。どこかで弊害が出てくると思います。それぞれの役割というのをイメージしながら、子どもたちに関わっていただけると良いと思います。特に、「環境」と「表現」との関わりが非常に重要になってきます。「環境を通して行う保育」については、保育所保育指針や、幼稚園教育要領からもわかると思いますが、子どもたちは、様々な関わりの中で、人などを含めた環境に刺激を受けながらいろいろな気付きを得ています。そして、その中で、子どもたちが自分で表したいことやものを表現できる過程を通して充実感と満足感を味わい、それが次への好奇心や自分から関わろうという意識や、主体的にもっとこうやってみたいという気持ちにつながっていくわけです。ですから、保育は「環境を通して行う」ことを意識しなければなりませんし、表現にとっても環境が非常に大事です。環境が表現を支えていく、相互関係ですから、大切に考えていただきたいと思います。園（所）においても一人一人が、身近な環境に主体的に関わって、環境との関わり方や意味に気付く、そして、それを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようなことを生かして、幼児と共によりよい教育環境を創造していると思いますから、環境というのは、みんなで知恵を絞って、考えていく大事どころだと思います。

7. 環境についてしっかりと考える

①身体感覚を養う

まずは、生活の中で様々な音とか形とか色とか手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむような環境を考えていきましょう。最近、小中学校に一人一台「端末」が入って、非常に便利になっていますが、美術とか、図工と

か、造形表現でいうと、視覚的な要素が強くて、身体感覚が弱くなっていかないと心配しています。たくさんの感覚を働かすということが大事だと思います。

ある本で読んだのですが、美術館で絵を見に行ったら、見に行った後にそこのレストランでご飯を食べて帰ると忘れないのだそうです。視覚的な感覚と味覚という別の感覚が働くことで、記憶に残りやすくなったということのようです。我々の世界はどっちかという、視覚の行為が多いのですが、それ以外の身体感覚（体）をいっぱい使うようにすべきではないかと思います。これは、造形表現の活動の中だけでやるのではなく、日常から子ども自ら関わられるように考えていくのが大事だと思います。

小学校の例です。洗濯バサミを作っていた会社から、余った洗濯バサミをたくさんもらったので、造形遊びに使えないかと考えられたそうです。いろんな色があって本当に都合がよくて、子どもたちは、色で分けてみたり、並べてみたり、何かの形を作ってみたり、何かに見立ててみたりしました。この素材のいい所は、一つの活動から次の活動につながる要素が強いということです。子どもたちは、はじめ、個人でやっていましたが、その内に、みんなで共同的にやって繋がっていきました。このような時、どのように材料を提供すればよいか、例えば、材料を最初からドーンと全部出した方がいいのか、半分くらい出して置いて、半分くらいは後から出した方がいいのか、この材料は前で、この材料は後から、といったことを、ぜひ考えてください。その時に大事なことは、この活動を通して子どもたちのどんな姿を実現するのかということです。子どもたちに願うその姿を実現するためには、どうすればいいのかということもぜひ考えてください。単発で終わってしまうのではなく、子どもが活動をしながら、次の活動を自分で見つけられるような、材料や場所を考えてもらいたいと思います。少しやったら「はい終わり」となるのではなく、今の活動から次の活動を見つけれられる活動になるように、材料の出し方や環境の設定をぜひ考えてもらいたいと思いま

す。最終的に、この洗濯バサミの実践では、活動が教室中に広がって、子どもが次の活動を自ら見つけていったということです。

②視点を持つということ

二つ目は、生活の中で、美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにすることです。イメージはすごく大事です。そのイメージを広げるためには、視点が必要です。自分にとって価値のあるもの（お金の価値ではなく、例えば、存在の価値等）は、実は、いくらでも子どもたちの周りにはあるけれど、視点を持たないと通り過ぎてしまいます。視点を持つというのはすごく大事なことです。

私のエピソードですが、フィンランドのヘルシンキの駅の横にあった工芸作品の商品を売っているお店の前を通りかかった時、何より私の気を引いたのはグリーンの壁面でした。（きれいなグリーンだなあ、ちょっと、森みたいだ。）と近づいてみたら、小さい紙のようなものがいっぱい貼ってあるディスプレイでした。もっと近づいたら、寿司のバランでした。まさかフィンランドで日本の寿司のバランに出会うとは、思いませんでした。気にしなかったら、そのまま通り過ぎてしまうところでした。人とは、そういうものなのです。美しいか、これがいい物か、自分にとって価値がある物かどうかは子どもが決めることです。「これは美しいだろう」と定まったような観点から教えるというようなことは必要ないのです。でも、視点が無いと、価値あるものに気付きにくいわけですから、そういう視点を与える言葉掛けをすることが大事です。子どもが、自分の価値や意味を見つけれられるような言葉掛け等を考えていく必要があります。

平成16年に川村学園女子大学の先生が行った子どもたちの体験活動に関する調査研究のまとめでは、小学校5年生で53.6%の子どもが日の出や日の入りを一度も見たことが無いと答えています。なかなか衝撃的な数字です。全体では、50.7%、半分くらいの子が見たことが無いと答えています。これを分析して、何か、結論が出たと

いうわけではないのですが、ある大学の先生が、「見ているけれど見ていないのだ。目の前にあるのだけれど、気付いていない。目の前にあっても、そこに意識が行っていないので、気付いていない。そういう子もいるのではないか。」というような話をされ、それは、確かにあるかもしれないと思って、聞いておりました。自分にとっての意味や価値のあるものがあつたとしても、そこに視点を置くとか、着目するというきっかけが無ければ、なかなか気付かずに通り過ぎてしまうのです。しかし、言葉掛けをする等子どもたちに視点を与えることで、「先生、こんなの見つけたよ。」と見つけられれば、先生は子どもの見つけたものに共感するようにしてあげましょう。必ずしもみんなが同じものやことに対して共通に良いと思わなくてもいいのです。そこが、造形表現の中で、特に大事なことだと思えます。今は、一人一人が違つていいことを認め、大事にしていきましょう。実は、小学校や中学校の各教科の中で、一人一人の自分のつくりだした世界を常に大切にするような教科は、多いようでそんなに多くはないのです。当然、ものの考え方の道筋は違ふというのがありますが、最後につくり出した答えまで、すべての子どもがつくつたものが間違いではないというのは、意外と少ないのです。ですから、こういった視点を大事にしてほしいと思えます。

③実際に見る・触れることの大切さ

実際に見るということ、触れるということの大切さを、高校1年生の生徒がリンゴの絵を描く実践を元にお話しします。3枚のリンゴの絵が飾つてあつたので、(何だろう?)と興味を持ち聞いてみると、1枚目は想像して描いたリンゴの絵、2枚目は写真を見て描いたリンゴの絵、3枚目は実物のリンゴを見て描いたリンゴの絵。そういう3枚の絵だったので。(面白い授業だな、面白い取組だな)と思って「何でこんなことしようと思ったのですか?」と担任の先生に聞いてみました。「美術を専門にするコースのある学校なので、それなりに描く力のある子がいるのは間違いないが、何か描こうとすると、すぐにスマホで画像

検索をして描く。本物を見るということは違ふのだよと口でいうより、実感させた方がいいと思って、取り組んだ」とのことでした。生徒も感想文で「実物を描くと、実際に触れることができるので、より詳しくどんな形かを表すことができると思った。色も直接自分の目で見るので、多くの色が見えた。本物を見ないとわからない色味や光の当たり具合や影のつき方など、観察しないと得られない情報が多くあることがわかつた。自分の目の前に実物があれば、見るだけではなく、触つたり、匂いを嗅いだりすることができるため、その匂いや感触まで絵に表すことができると思った」と書いています。要するに、甘いリンゴを描こうと思つたら、どんな甘さなのかを知らなければ描けないということです。またある生徒は「写真を見たりするよりも、実物が”ここにある”という存在感を感じることができました。」とも書いています。実は、物を描くという時に、物だけを描いているわけではなく、物を含んだ空間もセットになって見ているわけです。これは小さい子どもたちも一緒です。その物だけを見ているわけではなく、その物が置かれている空間と、その空間の中の物の存在というのを感じて、そこからスタートしながら考えるというのは、よくあるのです。ところが、写真というのは、空間が全くない状態でその物だけを見ているから、この高校生の場合、表現の時に物の存在感が大きく変わったということです。もう一人の生徒は「表を描こうと思つたら、裏を知らないで描けないのだということに気が付いた。」と書いています。要するに、リンゴの表は、裏側から繋がっているわけです。でも、写真を見て描くというのは、裏側を知らないままに表の見えている表層だけを描いているので、どうしてもちゃんと描けないということです。実際は裏側を描かないけれど、裏側がどうなっているのかを知ってから描くのとそうでないのとは違ふということなのです。園でも、動物園とか消防車とかの絵を描いたりすると思いますが、そういう時、対象の周りをクルッと回れるのに回らないで、一側面だけからしか見ないで描いたりすると、子どもたちは、その存在自身を表面的にしか捉えら

れないかもしれません。年齢の低い子どもたちでも、その存在感を非常に強く感じますので、何か対象と向き合わせる工夫をすることが大事なかなということ。

④主体性が生まれる活動とは

それから、子どもたち自身が感じたこととか、考えたこととかを自由に描いたりつくったりできる環境についても考えてみます。園(所)では、いろいろな方法や環境で表現活動をしていると思います。子どもたちは、感じたり考えたりしたことをどうしたら主体的に描く気になるのでしょうか。発達の段階で違いはありますが、まず、主体性が生まれる活動というのは、子ども自身がこういうことをやるのだなということとちゃんとわかっていたり、子ども一人一人が自分のやりたいことを見つけられるように活動設定がされていたりします。テーマ設定も、同様です。もう一つは、ちゃんとやりたいことがやれる環境の準備や材料や用具の準備などについても考えなければなりません。そう言った、[やるべきこと]と[やりたいこと]と[やれること]といった条件が重なり、子どもたちの主体的な活動が生み出されるように思います。

[やるべきこと]については、「何を」ではなく、「何のために」ということを、先生がきちんと持っているということです。「何のために」を明確に持つことは、言葉掛け等いろいろな所に表れてくるだろうと思います。また、活動を作業として見るのではなく、活動の中でいろいろなことを学ぶ、という学びの見通しを先生が持つということです。そして、最後に、活動を終える時、何らかの形で次につながるような終わり方ができるように工夫していこうということです。「はい、ここで終わりだからね。」と、ブツツと終わってしまうのではなく、最後が、次の何かにつながるような終わり方ができるといいなと思います。子どもたちも、次はこういうことをするのだな、というようなことを気付くことにつながるのだと思います。

[やりたいこと]は、どのように見つけさせれ

ばいいのでしょうか。なかなか難しいのですが、ここで考えておくことは、先生たちの必然性からスタートするのではなく、子どもの必然性からスタートする活動を考えるということです。これもなかなか難しいことですが、一人一人の子どもが、自分事となるようなことをがんばって見つけて、そこを活動の中核に持って来るようにするということです。最後には子どもが、自分なりの意味や価値をつくりだせるような時間にしていこうという気持ちを持って考えていくということが大事だと思います。先生方の思いの中で、活動を進めた子どもたち一人一人がやりたいことを見つけ、最後には、子どもたちのやりたいことが[やれる]ようにすることが大切です。それは[やりたいこと]が[やれる]準備をしっかりとしておくということでもあります。私も小学校の専科教員をしていた時、すごく忙しくて、材料等の準備が十分できないことがありました。準備不足が透けるように現れてしまいます。手を抜いたわけではないのですが、やりたいことがやれる準備をしっかりとしなければ、大概その授業は、子どもが主体的になりませんでした。しかし、先生の必然性ばかりで準備されると、子どもは意外と乗らなくて、深まりが見られないということが多いので、気を付ける必要があります。子どもの必然性を大事にしてほしいと思います。

それから、子どもたちの活動を通した学びというものを見てみると、教師が教えて子どもが学ぶ場面と、子どもたちが自分で学んでいく場面があります。今はどちらなのかということ活動をの時に見定めて、声掛けをしていくというのが大事だと思います。本当ならば子どもが自分で気付くことを、教師が言ってしまったり、子どもが学ぶ場面を奪ってしまったり、逆に、ここは教師が声掛けをしないといけないのではないかとこのところ、「自分でやったらいい。」と思いき掛けをせず、子どもは学べなかつたりということがありますから、教師が教えて子どもが学ぶことと、子どもが自分で学ぶことをしっかりと吟味して、見定めていくことが大切です。やはり、子どもたちが自己決定を積み重ねて、自己実現が果たせるようにし

ていくことをめあてにするということが大事だと思います。そして、その自己決定を積み重ねた過程をしっかりと見取って、子どもたちと共感していくといったことが、子どもたちの「やれる」ということにつながっていくのだと思います。

私自身が教師の時もそうでしたが、自分でやった指導を自分で振り返るということはなかなか難しいものです。自分の授業を誰かに見てもらって、いろいろとアドバイスをもらえる時はいいのですが、自分の普段の保育や活動を、自分でよかったかどうかを振り返るということが難しい時には、「やるべきこと」「やりたいこと」「やれる」を、振り返りの視点に使っていただいても良いのかなと思います。子どもたちの活動、過程の全部を見ていくというのは、なかなか難しいかもしれませんが、見てやろうという気持ちで関わっていくことが大事です。

活動の場づくり

一人一人が思い思いの場で描くというのが良い活動のめあての時もあれば、子ども同士向き合いながらみんなで描いた方が良い場合もあります。一番目指している姿に近づけていくには、いろいろな形態の中で、どの形態がいいのかと考える時に、活動のめあてが大事になってくるのだと思います。

部屋の中央の空間に材料を置き、囲むように大きな輪になって描くという活動の場を作ると、真ん中に材料を取りに行った時、周りの子を見渡せるようになり、他児の様子が見えます。そこを意識して、真ん中に用具を置く場合もあります。

四人が、向かい合せて床に座って描くという場では、一人の子がずっと他の三人を見ていて、他の子が絵を擦り始めると、その子も擦り始めるということがありました。それがいいかどうかではなく、活動の設定の仕方によって、そのようなことが起こるということです。あれがいいかどうか、あれが必要かどうかは、先生が考えることであって、どこで描こうと一緒だということではありません。ですから、指導者の意図というのをぜひ持っていたいただきたいのです。

時々椅子をひっくり返して、イーゼルみたいに描くということもありました。

材料や用具についても、最初から全部出しておいた方がいいのか、ちょっとずつ出す方がいいのかを考えて、やってもらった方がいいかと思います。すごく魅力的な材料は、時として全てを吹き飛ばすことがあります。ある小学校の授業で、先生が星のシールを出したら、それまでの目的とか、感じたこと等に関係なく、子どもたちは、とにかく、星のシールを使いたくなっていました。魅力ある材料というのは、そのくらい強力な力を持っているから、どう扱うのか、使わせた方がいいのか、否かというのを考えなければなりません。子どもたちが喜ぶからという理由で出すと、本当に大事なことが抜け落ちてしまうということがよくあります。十分に考えながら、材料や用具の吟味をしていただけたらと思います。例えば、全員前を向いて座り、前に材料・用具を置くという場合は、材料・用具を前に取りにいった子どもたちが、前で出会うということがあります。材料・用具を取りにいった子どもたちがそこで出会って、友達がどんな材料・用具を選んでいるのかなといった横の関係が生まれます。それから、材料・用具を真ん中に置くと、周りを見渡せるということも生まれるし、それぞれの反対側に座っている子どもたちが一緒になるという出会いが、材料・用具を取りに行く時にあります。活動の場の違いによって、そういった違いが出てくるわけです。席から材料・用具置場までにいろいろな友達のことが目に留まりながら行くということもあるということです。環境を考えると、この動線を見ながら、描く場、材料・用具の置場といった配置を、環境を考える時に意識することが大切です。ちょっと造形表現に距離がある、ちょっと苦手かなという子どもたちがいる場合は、余計にこういった環境を意識しながら配置していく必要があります。どう置いてもいいわけではなく、その意味等を考えながら、めあてに応じて、活動の環境を考えると、それが大事なのです。

子どもたちは、表現の素材と出会ったり、見立てたり、組み合わせを楽しんだりすることがあり

ます。そのためには、様々な素材、身体感覚を意識しながら選んでいくことが大事です。子どもにとって、イメージを広げるとか、イメージを表現することにつながるような魅力ある素材を選びます。しかし、さっきも言ったように、その魅力がすごい力を持ちすぎて、それだけで終わってしまうこともありますから、活動のねらいとイメージ、また幼児主体で関われるような素材であるか、といったものを考えていただけたらよいのだと思います。高く積み上げる、並べる、押しつぶすとか、倒す等、様々に関わることによって、その素材の特性を知ったり、使い方に気付いたり、またそれが、次の活動につながっていきます。これが、感性や想像力を育むことにつながっていくのだと思います。子どもは思いついたものを身の周りにあるものを使って、つくったり描いたりするという場合と、材料等と関わって、見立てて、いろいろなことを思いついて、つくったり描いたりする場合があります。ですから、両方の活動を保障できるように考えておく必要があります。みんなが、思いついたことをやっているのではなくて、すぐには思いつかない子もいます。これは、小学校でも中学校でも同じです。思考のプロセスの違う子どもたちがいるということを頭において、活動の方向性を一律にそろえてしまうのではなく、そのプロセスの違いが両方とも体験できるような環境を考えていくということが大事だと思います。

作品を飾る

そして、描いたりつくったりしたものを飾る、これはもう、先生方のお得意とするところだと思います。子どもたちが、自分のつくったもので遊びながら、一緒に飾り方を考えていきましょう。つくった後のことも見通しを持ちながら、やっていく、その時に、作品展みたいなものが、目的化してしまわないように、あくまで、学びの活動の一つとして考えてやっていくことが大事だと思います。子どもというのは、必ずしもはっきりとした必然性があるって、描いたりつくったりするばかりではありません。また、身近な素材に触れて、

その心地よさとかに浸っていることも多いです。自分で描いたりつくったりすること自体を楽しんで、次第に遊びのイメージを広げたりする場合があります。子どもたちなりの楽しみとか願いとか、幼児の遊びのイメージを大事にしながら進めていくことが大切です。作品をつくらせるとか、描かせることを目的にすると、遊びのイメージが損なわれることが多いのです。遊びのイメージを大切に、子どもの表現意欲を満足させていくことが、大事だと思います。先ほども言いましたが、過程の中に子どもたちの姿があり、学びがあります。先生が、子どもの学びを捉えることが大事ですが、何かの機会に子どもたちにも気付けるようなきっかけを作っておいて、この学びを保護者と共有したり、地域と共有したりしていきましょう。子どもの学びを支える応援団を作っていくといった点で、学びの明確化、育てほしい姿の明確化、こういったものを大事にしていくということが必要かと思います。

京都市では、「幼保小の架け橋プログラム調査研究事業」に取り組んでおります。この取組が、それぞれの子どもの学びを、小学校につないでいくものになることを期待しております。教育委員会のホームページでは、「幼保小の架け橋プログラム」の昨年度の調査研究事業の取組が公開されていますので、もし、どんな取組をしているのかと思われましたら、是非、ご覧いただければと思います。10分程度の動画になっています。

また、スタートカリキュラムでは、幼、保、認定こども園等と小学校の発達や学びをつなぐといった視点も小学校との連続性を考える上で必要になってくると思います。これを、造形表現を切り口にして考えていただければと思います。前提となるのはやはり、全ての子どもたちは、豊かな存在なのだ、これに尽きると思うのです。特に、造形表現においては、このことを前提に子どもに関わっていくということが大事だと思います。いろいろな子どもたちがいますが、元々持っている子どもの豊かさをどうやって造形表現によって引き出していくのか、それを引き出すためには環境をどう考えていくのか、子どもたちの無

限の可能性を引き出すための活動とはどうあるべきかということをぜひ考えていただきたいと思います。そして、造形表現は、特に、自分のこととか、自分の持つ世界が創造できることの面白さや楽しさが非常に実感しやすい活動です。しかし、先生方、大人の必然性が強くなればなるほど、この面白さや楽しさがどんどん薄れていきます。ですから、そこを大事にするためには、どういう活動をそれぞれの園（所）でやっていくのかということのを是非お考えいただけたらと思います。子どもは、元々豊かな存在であり、造形表現によってそれを引き出すのであり、空っぽの缶の中に何かを詰めるというものではありません。また、子どもたちは学びたくて、学びたくて仕方がない存在でもあることから、様々なことを多面的に考えていくということが大事だと思います。

今日は何か、指導のハウツーをお話する時間ではありませんでしたが、ぜひ、それぞれの子どもたちに向き合っていくための造形表現や環境とはどうあるべきなのか、そういったことを何かのヒントにさせていただきながら、子どもたちの豊かな学びが実現できることをご期待申し上げます。私の話を終わらせていただきます。

令和5年度第8回共同機構研修会 令和5年10月27日開催 於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館
